

## E. H. エリクソンの理論からみた アイデンティティと政治 (2)

——アイデンティティの感覚とはどのようなものか——

麻野 雅子

### 1 はじめに

研究全体における本論の位置づけ

本論は、エリクソンの理論から「アイデンティティの政治」を考察する研究の一部をなすものであり、エリクソンのいう「アイデンティティの感覚」とはどのようなものかを明らかにすることを目的とするものである。すでに拙論<sup>(1)</sup>で明らかにしたように、「アイデンティティの政治」論において展開されている様々なアイデンティティ概念は多義的なものであり、それが「アイデンティティの政治」理解の多様性を生んでいる。様々な見方があることはそれ自体否定すべきことではないが、「アイデンティティの政治」が現代政治において重要性を高めていくなか、どのような性格を有するのかを明らかにすることは緊急の課題である。とりわけ、「アイデンティティの政治」と自由主義の関係について理解することは、自由民主主義の後退が取りざたされるなか、重要性がきわめて高いといえる。

「アイデンティティの政治」の理解のためには様々なアプローチがありうるが、筆者は、現代的アイデンティティ概念の生みの親ともいえるE. H. エリクソンの議論に立ち返り、アイデンティティとはいかなるもので、どのような意味で政治と関連しているのかを明ら

かにすることに取り組んでいる。その背景には、アイデンティティという個人の心理的中核を表現する言葉が、多様な人びととの交渉や闘争の場である政治に直結していくことへの違和感がある。

エリクソンのアイデンティティ論は、若者による異議申し立てが盛んであった時代に展開されたものであり<sup>(2)</sup>、現代の政治状況と重なるところも多い。またエリクソンのアイデンティティ概念は、フロイトの精神分析から出発してはいるものの、当初から社会や文化、政治とのつながりを常に意識した社会性・政治性の強いものであり、アイデンティティが政治化する道筋を考察するうえでも有益である。エリクソンは、常に、心理（個人）と社会、個人の人生（ライフヒストリー）と社会の歴史（ヒストリー）、個人のアイデンティティとその時代その社会の集団アイデンティティが相互に関連しあっているという「心理社会的相対性=関連性 (psychosocial relativity)」をもとに考察を進める。そのため、心理・社会・歴史に関わる学問分野を自由に横断しながら思想を紡いでいくこととなり、読者はその縦横無尽な書きぶりに圧倒されることとなる。また、概念に明確な定義を与えて理論を構築していくのではなく、具体的な事象においていって複雑な全容を浮かび

上がらせるような独特の手法を採用している。この点で論文として構成し直す際に難しさがあるが、できるだけ明晰な叙述になるよう心掛ける。

### 本論のテーマ

本論のテーマは、エリクソンがアイデンティティの感覚 (a sense of identity) という言葉で表現した内容を明らかにしていくことである。まずは、アイデンティティという言葉の原義が同一性であることを確認し、そのうえで、エリクソンのアイデンティティにはどのような要素が付加されたのかを論じる。さらにエリクソンが感覚という表現を用いることの意味を明らかにしたうえで、アイデンティティの感覚とはどのようなものかを検討する。その際、「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚 (a subjective sense of invigorating sameness and continuity)」<sup>(3)</sup>という表現、とりわけそのなかの「斉一性と連続性の感覚」という要素に注目して、エリクソンのアイデンティティ概念がもつ特有の意味と意義とを示していく。

## 2 心理社会的アイデンティティ概念の提示

### アイデンティティ概念の原義とエリクソンが加えた意味

そもそもアイデンティティは、古くから、人やモノの同一性を指す言葉として用いられてきた。アイデンティティ (identity) は、ラテン語の *identitas* に由来し、「まったく同じである」「間違いなくその人である」といった内容を指す。エリクソンのアイデンティ

ティ概念も、自己の同一性や独自性を基盤とした概念であることは間違いなく、現在でも「私が私であること」や「私が何者であるかということ」を意味する言葉として広く理解されている<sup>(4)</sup>。1973年日本でエリクソンの『アイデンティティとライフサイクル』という著書が翻訳された際も、アイデンティティは「同一性」と訳され、本のタイトルも『自我同一性』という言葉が選ばれた。この著書の訳編者である小此木啓吾は、雑誌『エスプリ』のアイデンティティに関する特集号の冒頭論文で、「エリクソン以来、アイデンティティ (同一性) という言葉は、「自分であること」「自己の存在証明」「真の自分」「主体性」「自分固有の生き方や価値観」などと意識されるが、やはりエリクソンにとってもそれは、自分 (self) の連続性・単一性、または独自性・普遍性であり、また個人のこのような同一性の意識的感覚 (conscious sense of individual identity) である」<sup>(5)</sup>と述べている。また、「アイデンティティ (同一性) は、他に対して、自己の独自性・独立性を主張する強固な自我の存在と、異質なもの、他人性の明確な認識を前提」<sup>(6)</sup>としており、自他の区分よりは一体感に目を向けがち日本人にとって消化しにくいものかもしれないとも指摘する。このように、アイデンティティという概念が、「AはAである」という同一律に依拠した自己意識、例えば「私は〇〇という名前の存在であって、他の名前の人とは違う」「私は△△という独特の特徴をもつ唯一の人格である」という意識であることは議論の出発点とすべきこととである。

しかし、エリクソンのアイデンティティ概念は、こうした「私は何者か」に対する自己

意識や「私は□□である」という自己定義だけを意味するわけではない。エリクソンも、アイデンティティを、意識的自己イメージ、個人の特性、社会的役割と同じように扱おうと、アイデンティティのもつ、扱いがたい、悪魔的な意味が捨て去られてしまうと警告する<sup>(7)</sup>。小此木が指摘するように、エリクソンのアイデンティティ概念は、「特有の含蓄のある、精神分析的自我心理学の基礎概念」として提示されたのであり、それにより「論理学や哲学の領域を越えて、にわかに精神医学・心理学・社会学・教育学といった人間に関するすべての科学にとって必需品となるに至った」<sup>(8)</sup>のである。この独特の意味をもったアイデンティティ概念は、1960年代後半以降「危機」という言葉とセットになって人口に膾炙されるようになり、とくに若者には、自分自身の切実な心理的問題を浮き彫りにする言葉と受けとられた。エリクソンのアイデンティティとは、単に同一性や独自性、連続性を意味するだけの言葉ではなく、激しい変動にさらされる社会に生きているがゆえに、「自分は何者か」と問わざるをえない人たちに対して、直面している心理的危機がどのようなもので、その克服のためにどういうことが必要かを教える言葉でもあった。つまり、アイデンティティをめぐるエリクソンの理論は、激動の時代を生きる人びとが自らの心理的課題に向き合うための道筋を示すものだったのである。

溝上慎一も、アイデンティティがシンプルに「同一性」を示す概念であることを踏まえつつ、そうした同一性を意味するアイデンティティ概念史の視点からエリクソンのアイデンティティ論をみると、その本質的特徴は、

アイデンティティを心理や社会と接続させて議論したことにありと指摘する<sup>(9)</sup>。エリクソンのアイデンティティ概念は、社会や歴史と心理の深層をつなげて論じる、「心理社会的」(psychosocial)なものである。この心理社会的アイデンティティ概念には、精神分析学や発達心理学からの知見に基づく心理的要素と、文化人類学や歴史事例からの知見に基づく社会的要素とが入り込んでいる。

以下、エリクソンのアイデンティティ概念に含まれる特有の含蓄を明らかにするべく、心理的要素と社会的要素という2つの要素に分けて、その内容を検討していく。

#### エリクソンのアイデンティティ概念の心理的要素

まず、心理的要素を確認するために、エリクソンが「パーソナル・アイデンティティ(personal identity)と自我アイデンティティ(ego identity)を区別することが必要」<sup>(10)</sup>だと指摘している点から検討していこう。ここでいう「パーソナル・アイデンティティ」は、時間・空間の中で自分自身の存在が自己同一性(selfsameness)と連続性(continuity)を備えているという知覚と、他者が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚という2つの意識から成り立っているとされる。この2つの意識とは、自分自身が過去から現在、幼少期から現在に至るまで連続的な自己であるという認識と、そうした一貫性のある自己の存在が社会の中で他者に認められ受け入れられているという認識と言い換えることもできよう。

エリクソンは、「パーソナル・アイデンティティ」を構成する、自己と他者からの2つの

存在認識に加えて、自我アイデンティティには別に必要なものがあるという。エリクソンが「自我アイデンティティという言葉で読んだものには、単に存在という事実以上のこと」、つまり、「存在の自我の質」というべきものが必要なのである<sup>(11)</sup>。ここでいう「自我の質」とは何か。エリクソンの自我観を踏まえてその内容を明らかにしていこう。

自我という概念が、精神分析上重要な概念であるのはいうまでもない。ただフロイトにおいては、イドと超自我を妥協させるだけの哀れなものであったのに対し、エリクソンの自我は、「人格形成の中心となる、選択・統合・首尾一貫・連続の作用をなす担い手 (a selective, integrating, coherent and persistent agency central to personality formation)」<sup>(12)</sup>とみなされている。つまり、自我は、体質や独自のリビドー欲求、与えられた能力や重要な同一化、効果的な防衛や成功している昇華、幼児期の経験や無意識的記憶、継続的に担っている役割などを徐々に統合 (integration) ないしは総合 (synthesis) していくことで、その人ならではの個性のスタイル (the style of one's individuality) を形成する役割を果たす<sup>(13)</sup>。エリクソンは、自我を個性の守り手 (a guardian of man's individuality) だと表現する。自己という小さな存在には、欠けることなく全体としてまとまっている (wholeness) という感覚、時空の中心にいるという感覚、選択の自由をもつという感覚など、個性や自らのスタイルを確立し維持するために必要な感覚がある。自我はそうした感覚を自己がもてるように、様々なレベルの経験や記憶を再構成し総合しているのである<sup>(14)</sup>。

個性の守り手である自我がその総合に成功したときに得られるのが「自我アイデンティティ」である。自我の総合方法 (the ego's synthesizing methods) とは、「様々な出来事を秩序づけて整理」することで「葛藤しあう経験を支配し、行為に導く」ことであると指摘される<sup>(15)</sup>。この自我総合によって自分らしい行為のスタイルを作ることができたとき、その人は、意識的および無意識的に、自らが主体的で能動的で活力に満ちているという感覚、自分自身の人生を歩んでいる感覚、自分の進むべき方向がわかっているという感覚をもつことができ、能動的な存在として社会に積極的に関わることができる。エリクソンが自我アイデンティティ探求の過程でなされるべき問いかけについて、単に「私は誰か」ではなく、「私は自分自身を何にしようと思っているのか、私は何に働きかけなければならないのか」<sup>(16)</sup>であるというのは、アイデンティティが、存在確認にとどまらず、社会的行為へとつながっていることを示唆している。

#### エリクソンのアイデンティティ概念の社会的要素

このように、エリクソンのアイデンティティ概念には、「自我の質」、自我総合といった心理的要素が組み込まれているが、この自我総合は、自己の心の内での無意識的・意識的営みというだけではなく、行為へとつながり社会へと広がっていくものでもある。その意味で、アイデンティティは、心理社会的であり、心理的要素と分かちがたく社会的要素が組み込まれているものである。

最初の著書である『幼児期と社会』において、エリクソンは、自らの研究の中心テーマ

を「自我が社会と結ぶ関係」<sup>(17)</sup>だと述べている。この著書で、エリクソンは、具体的な事例を挙げつつ、様々な身体的・心理的・社会的危機を経験していく子どもが、そのときどきに自分なりのやり方で経験を受け入れ意味づけて自我総合へと至るプロセスとその困難さを描いている。自我総合は、子ども個人の発達課題ではあるものの、人が「母親の胎内ではじめて手足を動かした瞬間から、最後に息を引き取るまで、常に、家族、階級、地域社会、国家という地理的および歴史の一貫性のある集団に分類され、有機的な形を与えられる」<sup>(18)</sup>存在である以上、それぞれの発達段階で、社会の一員としての自らの立場を見出していく必要がある。例えば、「自分が歩けるようになったことにきづいた子どもは、単に歩くという行為を反復し完成させようとする衝動にかられているわけではない」<sup>(19)</sup>。子どもは、身体を自由に動かせるようになることと社会的な承認が一致していることを通して、自尊感情を手に入れるのである。子どもは、社会的リアリティの中で明確な位置づけをもった存在へと成長しつつあるという感覚を欲しており、そうした感覚を基礎に青年期以降、人は、子どもを育て共同体を支える大人としてのアイデンティティ形成の営みへと進んでいく。

これまで述べてきたように、人は、有機体や自我であると同時に、社会の一員として生きている。自我は、身体と社会に関する自己の経験を組織化し総合することで、自分が本当に自分であるという意識、言い換えれば自我アイデンティティをもつことができる。成長しつつある子どもが、主体的で能動的な感覚、自尊感情や生き生きとした現実感を獲得

するには、仲間や大人からの承認と社会での位置づけが必要であり、その意味で、アイデンティティは常に心理的であると同時に社会的なものなのである。

こうした自我と社会の関係性を、エリクソンは、集団アイデンティティ (group identity) という言葉を使って説明している。集団アイデンティティとは、その集団がどのような地理的、歴史的パースペクティブをもち、どのような経済的目標を掲げ、そのためにどういう手段をどのように確保しているかといったことから決まってくるものである<sup>(20)</sup>。自我が経験を積み重ねて自我総合をなしとげるためには、「自らの属する集団アイデンティティの中で、成功した一事例として認められているという自覚」、「そしてそれが、集団アイデンティティの求める時間—空間とライフプランに一致しているという自覚」<sup>(21)</sup>が必要なのである。集団の側、つまり、部族や国民は、子どもたちが将来集団が望む大人のアイデンティティを獲得するように、「いろいろな直観的な方法で子どものしつけを利用する」<sup>(22)</sup>。小さな子どもは、恐怖や不安、誇りや怒り、罪悪感や承認欲求などの感情を利用されつつ、その集団の時間—空間の捉え方や人生設計の概観、つまりは集団アイデンティティを伝えられ、受け入れることを期待される。そうした日常的な働きかけを通して、子どもたちは、その集団アイデンティティに根づく形で自らのアイデンティティを形成していく<sup>(23)</sup>。

このように、自我アイデンティティは、自己の属する集団アイデンティティとのある種の一致を実現させていくことが求められている。ただし、自我アイデンティティと集団ア

アイデンティティは、相互に関連しているというだけでもないし、自我アイデンティティが集団アイデンティティを受容しそこに根づくという一方的関係でもない。自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係は、お互いを補強しあう相互性 (mutuality) により成り立つものである。つまり、社会の成員がその社会の中でその人なりの個性のスタイルを確立し自我総合をなしていくことができれば、その個人が活力を得るとともに、社会もまた活気づく。自我と社会は、お互いを活性化 (activate) する存在なのである。この「相互性」の考え方は、エリクソンの提示する倫理の中核をなすものでもある。エリクソンは、個人と集団の関係のみならず、治療者―患者の関係、子どもと親の関係など、あらゆる人間関係の基礎に、「他者を強くしていると同時に、自分も強くする相互性」<sup>(24)</sup>の原則をおくべきだとして、それを現代の黄金律とみなしている<sup>(25)</sup>。「集団アイデンティティと自我アイデンティティとの、またエートスと自我との相互補完が、自我総合にとっても、社会組織にとっても、大きなエネルギーの潜在力を提供する」<sup>(26)</sup>のであり、能動的で積極的な人生も活力ある社会も、この相互性をなくして実現できないのである。

ここまでアイデンティティの社会的要素、自我と社会の関連という点について述べてきたが、さらに付け加えるべき点として、自我と社会変動との関係がある。自我が自らの属する集団アイデンティティから活力を得て自我総合の営みを成功させていくことが一つの理想ではあるが、社会内の集団は、技術革新の発展や外からの侵略、それに伴う社会構造の変化によって、それまでの時間や空間のイ

メージ、経済活動のあり方や生活設計、政治的諸制度やしつけの方法等、その集団アイデンティティを構成する要素を維持できなくなることがある。集団アイデンティティが時代遅れの魅力なきものとなるとき、その集団内で生きる人たちは、不安や怒りを感じ、アイデンティティの混乱に陥る。人びとが、「自分はどう生きるべきなのか」「何に働きかけていけばよいのか」という問いに直面し、自らのアイデンティティを意識するのは、まさに社会変動や歴史の変化により、集団が、そして自らが、危機に陥ったときである。エリクソンのアイデンティティ概念が「アイデンティティの危機」として語られ受け入れられたのは、そういう理由からである。

このようにエリクソンは、存在の同一性というアイデンティティ概念の原義に、心理的要素や社会的要素を加えて、独特の意味をもつ豊かで複雑なアイデンティティ概念を提示した。次は、「アイデンティティの感覚」という点に焦点をあてて、エリクソンのアイデンティティ概念を検討していく。

### 3 アイデンティティの感覚という捉え方

#### 感覚という意味

エリクソンは、アイデンティティ概念を提示するとき、アイデンティティの感覚 (a sense of identity) という表現をよく用いる。『幼児期と社会』において、「～の感覚」とは、意識のみならず無意識にも及ぶものであり、自分自身が感じ取るものであるとともに他者によっても観察可能なもの、検査や分析によっても測定可能なものだ<sup>(27)</sup>と述べられて

いる。その後、アイデンティティの概念が広く一般社会に受け入れられ多様な意味で用いられるようになると、心理を扱う専門家たちの間では、科学的測定のために定義を厳格化しようとする動きがでてきた。こうした状況を受けて、エリクソンは、1968年の論文集のプロローグで、アイデンティティに論理的または実験的操作性をもたせるために、「この概念のもつ、より扱いがたく、またより悪魔的な——つまりしばしばより活力に満ちた——言外の意味を捨て去ろうとしている」<sup>(28)</sup>ことに警戒感を示すこととなった。「私がしたことは、誰もが一度は経験したことがあり、したがって、現在それを痛切に体験している人びとのなかにその存在を認めることができるような何ものかに、最も的確な名前を与えたということ」<sup>(29)</sup>だと述べている。アイデンティティの感覚、あるいはアイデンティティの危機の感覚とは、無意識にも及ぶがゆえに、自分にも他者にも捉えがたい切実な実感であるといえよう。

この点に関して、西平直は、アイデンティティが正確には、a sense of identityとして、当の本人の感じる感覚 (sense) を、そのままに写し取るための言葉であったことの重要性を指摘する。つまり「このアイデンティティという言葉は、説明概念である以前に、それを生きる者自身によって使われるということ、たとえば、生き方の困難を抱えた青年たちによって自分の言葉として使われ、自分なりの生き方を発見するための手掛かりとして掴み取られていた、ということ」<sup>(30)</sup>を踏まえなければならない。さらにいえば、「この言葉が、理解する者にとって、もはや単なる〈何かについての説明〉ではなく、〈感覚を通し

て直接に生きられた言葉〉と成るのを待つことなくしては、この言葉を理解したことにはならない」、「エリクソンにおけるアイデンティティという言葉は、各人がそれぞれのアクチュアルな現実のなかで使ってみることによって、はじめて、その本来の意味において理解される道が開かれる」<sup>(31)</sup>のものである。西平が指摘する通り、臨床家として、人の言葉や態度、さらにはその無意識に向き合うエリクソンのアイデンティティを理解しようとするとき、こうした感受性は不可欠なものであろう。以下、2人の偉大な思想家の言葉から、アイデンティティの感覚とはどのようなものかを描いていく。

#### アイデンティティの感覚とは1—ジェームズの手紙から

エリクソンがアイデンティティの感覚を説明した最も有名なくだりは、ウィリアム・ジェームズの言葉を紹介した部分である。そこでエリクソンは、「私がアイデンティティの感覚と呼びたいものが、はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚 (a subjective sense of invigorating sameness and continuity) として、ウィリアム・ジェームズが妻に充てた手紙の中に最もよく描写されているように思われる」<sup>(32)</sup>と述べている。以下、ジェームズの手紙の表現を引用する。

人間の性格というものは、精神的もしくは道徳的な態度の中にはっきり見て取れるものです。そのような態度が身に宿るとき、人間は、物事に積極的に、しかも生き生きと関わる自分を、きわめて深く、強く感じるのです。そのような瞬間

には、次のように叫ぶ内なる声が聞こえてきます。「これこそが真実の私だ！」<sup>(33)</sup>

「これこそが真実の私だ」という実感にアイデンティティの感覚が端的に示されている。エリクソンは、この実感には常に以下のような要素が伴うと指摘して、のジェームズの記述を引用する。

能動的な緊張感、いうならば自分自身を支えているという感覚、そして外界の諸事物がそれぞれの役割を果たし、私の営為を十分な調和のとれたものにしていくことへの信頼感、しかもその際に、いかなる担保をつかなくてもそうなるだろうという信頼感、というような要素のことです<sup>(34)</sup>。

こうした要素を伴う感覚をもちえたとき、「ある種の深い熱狂的な歓喜を、また、すべてのことを進んで行い、すべてのことを喜んで耐えようという激しい意欲を感じる」とジェームズは記している。加えて、ジェームズは、この「歓喜や意欲」が、「言葉では具体的に表現できないような単なるムードや感情ではあっても、少なくとも私にとっては、明らかに、すべての能動的・理論的決断を下す際の最も深い原理をなしている」とも述べている。エリクソンは、こうしたジェームズの表現に関して、「彼はアイデンティティの感覚を描写しているのであり、しかも原則的には誰でも経験できるようなものとして描写している」という。つまり、ジェームズの手紙に書かれた、「これこそ私だ」と感じられ、すべてのことを進んで行おうとする意欲にあ

ふれた状態を、エリクソンは、「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚」であるアイデンティティの感覚の最適な描写と考えているのである<sup>(35)</sup>。

この「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚」という表現のうち、「斉一性と連続性」という部分は、アイデンティティの概念の原義に直結するものであり、エリクソンのアイデンティティ概念においても中核に位置づけられるべきものである。「はつらつとした」と表現されている部分、つまり「物事に積極的に、しかも生き生きと関わる自分」であるという部分は、エリクソンがアイデンティティの原義に加えた特有の心理的要素だといえる。

#### アイデンティティの感覚とは2—フロイトの演説から

ジェームズの手紙に続いて、エリクソンは、1926年にウィーンのエダヤ人文化教育促進協会で行われたフロイトの演説を取り上げる。これは、アイデンティティの感覚の社会的・集団的・文化的要素について言及したものである。長くなるが、フロイトの言葉を引用する。

私をユダヤ民族に結びつけていたものは（私はそれを認めることを恥じるものではありませんが）、信仰でもなければ民族的な誇りでもありませんでした。というのは、私は今まで神を信じてきませんでしたし、また、人類文明のいわゆる「倫理的」基準に敬意を払わなかったわけではないにせよ、事実上、無宗教で育てられたのですから。私は、民族的熱狂に引



き込まれそうになりますと、いつも、われわれユダヤ人が共に生活している人々の例を警告として、有害な誤った熱狂であると考え、それを抑制しようと努力したのです。けれども、そのほかにも、ユダヤ民族とユダヤ人を抑えがたく惹き付けるものが山ほどあります。——数多くの不分明な感情の力。それは、強くなればなるほど、言葉では表現できなくなるのです。そして、内的アイデンティティの明確なる意識。つまり、共通の精神構造をもつことの心安らかなプライベートです。このようなことは別にしましても、私の苦難だらけの人生行路にとって必要不可欠なものとなった2つの特徴は、ひとえに私のユダヤ人としての性質に負うものだという自覚が、私にはありました。私はユダヤ人でありましたため、他の民族の人々の知性の働きを限定してしまった数多くの偏見から自由であったこと、そして、私はユダヤ人であったため、いつでも野党に与する用意ができており、「凝縮された多数派(compact majority)」と折り合わなくともやってゆける備えができていたことです<sup>(36)</sup>。

エリクソンは、「どう翻訳しても、フロイトのドイツ語原文における独特の言葉の選択を正しく伝えることはできない」としながらも、「共通の精神構造をもつことの心安らかなプライベート」というのは、「単に「精神的」なのではなく、またまったく「プライベート」なのではなく、それを内に共有しあっている人びとのみか理解でき、また、概念的な言葉ではなく神秘的な言葉によってのみ表現可能

な、深い共同体感」だと解釈する<sup>(37)</sup>。つまり、自らのアイデンティティがユダヤの「深い共同体感」に根づいていること、言い換えれば、ユダヤ教の信仰を拒否してきた自らの人生も、偏見からの自由と大胆な思索の自由というユダヤ人の集団アイデンティティに支えられてきたことを、フロイトが認めているのだと、エリクソンは理解する。フロイトの自我アイデンティティに、「長い迫害の歴史を通して追い払われ、軽蔑されてきた民族が抱き続けてきた、苦い自尊心の感覚が含まれている」ことがフロイト自身に認識されていたことは、「私が悪魔的でしかも活力的と呼んだ問題の側面のいくつかを、的確に指摘している」と述べている<sup>(38)</sup>。

別の箇所では、以下のように説明する。こちらにも長くなるが、引用する。

フロイトが内的アイデンティティ(inner identity)について語ったのは、自分とユダヤ人たちとの結びつきを明確にしようとした時であった。そしてこのユダヤ人としての内的アイデンティティは、人種や宗教にではなく、むしろ野にあって生きようとする共通の心構えと、知性の働きを狭めるようなどんな偏見からも解放された共通の自由とにその基礎をおいている。つまりここでアイデンティティという言葉は、彼の属する民族《ユダヤ民族》の、その特異な歴史によってつちかわれた固有の価値観と一人の個人《フロイト》とのきずなを意味している。しかしまたそれは、この個人の固有な独自の発達の礎石をも意味している。……ここで重視されたのは、一つの集団

の内的な統一の本質をなすものの見方（価値観）と、その個人の核心をなす何らかとのアイデンティティである。……このアイデンティティという言葉は、自己自身の中の永続的な同一（自己同一）という意味と、ある種の本質的な性格を他者と永続的に共有するという意味の双方を暗示するような相互関係を表している<sup>(39)</sup>。

エリクソンは、フロイトをはじめ偉大な人物たちの文章や人生をたどることは、個人の自我や人生が、「個人の中核に、かつ、その人の共同体文化の中核に「位置づけられる過程」、つまり、実際、これら2つのアイデンティティのアイデンティティを確立する過程を扱っている<sup>(40)</sup>のだと表現している。2つのアイデンティティのアイデンティティという表現は、苦難にさらされながらも能動的に生きようとする人間の生々しい個人的な感覚であるアイデンティティが、自らの生きる集団の他者と共有するものであり、集団アイデンティティと深い結びつきをもつものであることを意味している。

エリクソンは、多様な暗示的意味をもつアイデンティティという言葉の説明するのに、「個人のアイデンティティ (individual identity) の意識的感覚」、「個人の特性の連続性を求める無意識的な努力」、「自我総合 (ego synthesis) の隠れた働きの判断基準」という3つの要素に加えて、「集団の理想やアイデンティティとの内的結びつきの維持<sup>(41)</sup>」を挙げている。ここからも、アイデンティティが主観的であると同時に社会的・集団的であることを読み取ることができよう。

この自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係が相互性に基づくものであることはすでに指摘した通りである。

このように、エリクソンは、アイデンティティの感覚を、「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚」であり、集団アイデンティティとの深いつながりをもつものとして提示している。次は、この「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚」という表現のうち、「斉一性と連続性の感覚」という部分に着目して検討を進める。なお、「はつらつとした」感覚、「悪魔的でかつ活力的である」感覚という要素については、エリクソンが与えた特有の含意であり、きわめて重要であるが、ライフサイクル論で展開した各発達段階で得ることがのぞまれる「基本的な強さ (basic strength)」や「活力 (virtue)」という概念を踏まえて論じなければならないので、稿を改めて論じることとする。

#### 4 斉一性と連続性の感覚とアイデンティティ

##### 斉一性と連続性の感覚

私たちは、自分自身の存在について、ある種の斉一性と連続性を暗黙の前提として、生活している。昨日の自分の身体が一晩の睡眠で変わってしまっているとは思わないし、昨日の自分がなした行為の責任は当然今日に引き継がれると考える。逆に、日々自らの存在の斉一性と連続性を疑っては、安心感や自信を失い、うまく社会生活を送ることができなくなる。

ただ、何かのきっかけで、自らの存在の斉一性や連続性を疑ってしまうことはある。そ

んなときは、昨日までの自分のままではいられないと感じ、これから自分はどうなってしまうのかと不安に襲われる。大災害や戦争、肉親の死など、日常生活が根本から揺るがされる出来事に直面したり、就職や結婚など、新しい人生の選択を迫られたり、経済状況が悪化したり、人間関係がこじれたりして、これまで継続して担ってきた自分の仕事や役割がこれでいいと思えなくなったりすると、これまでの自分とこれからの自分がうまくつながらず、心理的混乱に陥ることがある。連続的に続いているはずの人生が何らかの事情で断絶されたと感じるとき、人は、自らの斉一性と連続性を疑い、改めて「自分は何者か」「自分はどう生きたいのか」を問うことになる。つまり、こうした危機にあって、人は、「アイデンティティを最も意識する」<sup>(42)</sup>のである。

ジェームズの手紙やフロイトの演説にあるように、アイデンティティの感覚は、長い心理的苦闘のすえに得る、「これこそ私だ」というはつらつとした感覚であるが、その点からみると、自らの斉一性と連続性の感覚は、生き生きとしたアイデンティティの感覚を得るための条件であり、心理的基盤だといえる。自分のやるべきことが見つからず、何に働きかければよいかかわからず、自分の将来について悩んでいるとしても、「私は私である」という自らの存在の斉一性と連続性については多くの人が自明のものと考えている。この自明性を失い斉一性と連続性を疑う状態を、エリクソンは、アイデンティティの拡散 (identity diffusion) あるいはアイデンティティの混乱 (identity confusion) と表現する<sup>(43)</sup>。

アイデンティティの拡散・混乱とその対処  
エリクソンがアイデンティティの拡散あるいは混乱という現象に関心をもち、アイデンティティの危機について語ったのは、第二次世界大戦中に退役軍人対象の診療施設で働いていたときである<sup>(44)</sup>。『幼児期と社会』では、自我アイデンティティの危機にさらされた服役軍人の例として、30歳をすぎたばかりの教師の男性患者を取り上げている。この「戦争神経症」と診断された患者は、「自分が誰かは知っている」という意味でのパーソナル・アイデンティティは保っていたが、自己が斉一性と連続性のある一貫した存在だと感じて行動する能力に障害が認められた。具体的には、ひどい頭痛のために円滑な日常生活を営むことができなくなったことに加え、少しの金属音が聞こえただけで攻撃されているのではないかと恐怖に震えた。外からの刺激を取捨選択して無視してよい刺激には注意を払わずショックを和らげる能力を失い、過度に敏感な驚愕反応に陥っていたのである。熟睡することも良い夢を見ることもできなくなった。戦争に行く前までは「何にでも耐えられる」善良な人だと自信があったにもかかわらず、いまや、唐突に奇妙な感情や考えが浮かんだり、突然激しい恐怖や不安に襲われたりして、「自分の感情の動きに全く無力」となってしまった。生活はばらばらで、再び一つにまとまる気がしない感覚に悩まされていた。家の近くで道に迷うようになり、無意識に間違ったことを口走るようにもなった。つまり、「時間や空間を構造化し、何が本当のことを確かめる自我の機能に頼ることができなくなっていた」のである。こうした状態が、自我の機能障害、急性のひどいアイデンティ

ティの拡散・混乱である<sup>(45)</sup>。

アイデンティティの拡散・混乱に悩む患者を前に、臨床家としてのエリクソンは、身体的・心理的「症状」にだけ注目して治療に取り組むことの不十分さを指摘する。自我の機能障害をもたらす原因は単純ではなく多数存在するがゆえに、症状は、「人の経験のさまざまな側面の一部である、ということに目を向ける」<sup>(46)</sup>べきなのである。エリクソンは自らの治療方法をこう表現する。「われわれのサーチライトは、この症例のある一つの面やメカニズムだけを取り上げて、それに焦点を合わせることはしない。むしろそれから多数の要因のまわりをわざと無作為に照らすことによって、その障害の及ぶ領域を探り、その範囲を見極めようとするのである」<sup>(47)</sup>。

例えば、この患者が自我障害に陥ったのは、戦闘によって集団的パニックが生じたこととそのときの上司の振舞が患者にとってショックなものであったこと、当時患者が極度の疲労と高熱で身体が弱っていたこと、これまでの人生において善良で我慢強い自己イメージを維持するべく努力してきたにもかかわらず戦闘から離脱する選択をせざるをえず自尊心が傷ついたことなど、様々な要因が組み合わさったことによる。言い換えれば、有機体(身体)、自我、社会の3つの領域で生じた変化が絡み合っ、この患者はアイデンティティの拡散・混乱に陥らざるをえなかったのである。さらに、帰国してからもひどい頭痛に悩まされ続けたのは、アメリカ人の集団アイデンティティ、つまり「アメリカ人は自由に動くことができる存在だという意識」に原因の一端がある<sup>(48)</sup>。

このように身体と自我と社会の領域に生じ

た変化は、ばらばらにみても意味がない。肉体的変化であれ、人格の変容であれ、それから社会的変動であれ「どの領域の変化から着手したとしても、他の2つの領域の変化についても考察を繰り返さなければならない」<sup>(49)</sup>。エリクソンが主張する、身体・自我・社会の三層からみる治療方法は、身体レベルの症状や自我の混乱や不安など主観的で個人的な症状が、その人の属する集団や社会のあり方と不可分であること、および、自我と社会との関連が緊密であることを示すものでもある。

アイデンティティの感覚の回復—アイデンティティは同一不変ではない

アイデンティティの拡散・混乱といった苦境から抜け出るには、自らの存在がある種の斉一性と連続性をもったものであるという感覚を取り戻すことが不可欠であり、そのためには自我総合を構築し直すことが必要である。こうした自我総合を再構築する営みは、自我障害といった症状を伴うアイデンティティの拡散や混乱のみならず、様々な人生の段階、とりわけ青年期において、アイデンティティの危機を迎えるたびになされることになる。そうした意味で、アイデンティティは、混乱や危機のたびに作り直されていくものとなる。

アイデンティティの原義である同一性という観点からすると、アイデンティティは、一度確立したら変わらない、唯一の本来の自分という意味で理解されるかもしれないが、それはエリクソンの意図するものではない。この点、宮下一博は、日本におけるアイデンティティ概念の誤解と本質的内容について説明し

たなかで、「アイデンティティに「同一性」という訳語が充てられたが、この訳語が定着することによって「同一性=変わらないこと」という誤解が生まれてしまったように思う」と述べている。具体的には、職業に関しても、青年期に抱いた希望（夢）を何があっても変わらずに希求していくことが「アイデンティティ」なのであるという誤解が生まれてしまったというのである<sup>(50)</sup>。

エリクソンもまた、そうした誤解を解くべく、アイデンティティというのは、「パーソナリティの鎧 (a personality armor)」ではなく、何らかの静的で不変な形の「達成 (achievement)」として「確立 (established)」されることのないもの」だと指摘する<sup>(51)</sup>。エリクソンのいうアイデンティティとは、危機やその際に起こる発達や成長と不可分であり、一度獲得したら失われることも形を変えることもない不変のものではない<sup>(52)</sup>。アイデンティティの感覚とは、「鎧」のように、形を変えず自我を防衛してくれるようなものではないのである。

アイデンティティの感覚は、自らの存在の斉一性や連続性を確かなものとして受けとめられる感覚を不可欠の要素としている。そうした斉一性と連続性の感覚があつてこそ、過去の自分と現在の自分、未来の自分がつながって、「これこそ私だ」という、はつらつとした意識をもつことができる。しかし、何らかのきっかけで、それまで自明であった自己の斉一性や連続性に疑念が生じて、混乱することがある。そうした危機にあたって、自我は、身体や社会レベルで生じた様々な経験を総合し直し、揺らいだアイデンティティを新たなものに作り替えて、再び「はつらつと

した」自分、「物事に積極的に、しかも生き生きと関わる自分」であるという自信を取り戻すことが求められる。アイデンティティは、必要に応じて組み替えられるべきものであつて、同一不変のものではない。

また、アイデンティティの感覚は、身体・自我・社会のレベルの影響を受けつつ形成されていくものである以上、社会の変化により、自我が混乱し、「何に働きかければよいのか」わからなくなり、積極的に物事に取り組む意欲でもあるアイデンティティの感覚を失うこともある。自我アイデンティティは、集団アイデンティティに根づいたものであるため、集団が受けた経済的・政治的変動と無縁ではいられない。社会変動という観点からも、具体的な個人や集団のアイデンティティやその感覚は、同一不変ではいられない。

さらに、エリクソンは自らの提示したアイデンティティ概念についても、「この概念の本質上、その言葉の意味するところは、変転極まりない歴史的状況によって変化し続ける」<sup>(53)</sup>と述べている。つまり、個人や集団の具体的アイデンティティと同様、アイデンティティ概念もまた変動する。エリクソンの盟友であったロバート・リフトンは、こう述べている。

私の研究は、デヴィッド・リースマンやエリック・エリクソンといったような社会的、心理学的な理論家たちとかなり共通した考えをもって行われた。この2人が強調したのも、個人の内面生活がより大きな歴史の流れと結びついて形成されてゆくという、そのあり方であった。エリクソンのアイデンティティの概念

は、とりわけ不変性の原理と手を切ろうとする努力であった<sup>(54)</sup>。

エリクソンは、臨床家として目の前の患者との親密な関係性のなかでその表情を読み取りその声に耳を傾けることを重んじたように、理論研究においても、常に具体的な社会や時代の変化と向き合い、自らのアイデンティティ概念の意義や有用性を繰り返し問うていた。自らのアイデンティティ概念が、固定的な指標のようになって、説得力やリアリティを失うことを警戒し、様々な観点から、様々な言葉で、表現することをやめなかった。アイデンティティ概念は変化し続けるべきものだったのである。

以上からいえることは、エリクソンのアイデンティティ概念ならびにアイデンティティの感覚と表現したものの中核に「斉一性と連続性の主観的感覚」があることは確かであるが、とはいえ、それ自体が同一不変であるというわけではないということである。エリクソンのアイデンティティ概念には、同一性という原義が含まれているものの、混乱や拡散、危機とその克服、発達や成長、歴史的変動という要素を組み込むなかで、同一性というだけでは表現しがたい、独特の意味をもつ概念となった。

ただ、アイデンティティの感覚を自我総合の営みと結びつけていることからわかるように、アイデンティティは、ばらばらのものではなく、統合されたもの、全体としてまとまったものとして描かれている。その点に関して、ますます社会変動が激しくなっている後期近代社会において、統合されたアイデンティティをもつことなど不可能であるとする

立場から、エリクソンのアイデンティティ概念の古さを指摘する議論も多い。本論で検討してきた点を踏まえれば、エリクソンのアイデンティティ概念が、同一性、不変性を意味するがゆえに時代遅れであるとする批判はあたらぬとしても、社会の流動化、価値の多元化、将来の見通しにくさが進むなかで、エリクソンが想定したような、自我が総合や統合という営みそのものが困難ではないのかという指摘を無視することはできない。慎重に検討しなければならない重要な問題である。また、エリクソンが描いたようなアイデンティティの感覚をもつことを、それが無理な状況にある現代の人びとが求め、そうした願望をもとに「アイデンティティの政治」を展開していることこそ問題だとも考えられる。この点についても、検討が必要であろう。これらの点に関しては稿を改めて論じたい。

## 5 おわりに

以上、本論では、まず、アイデンティティ概念の原義を確認し、そのうえで、エリクソンのアイデンティティ概念が独特の含意をもつものであることを指摘した。その含意とは、端的にいうと、エリクソンのアイデンティティが、心理社会的なものだということである。心理社会的ということの意味について、心理的要素と社会的要素に分けて検討した。

次に、エリクソンが、アイデンティティを語る時「アイデンティティの感覚」という言葉を多用することを踏まえ、「感覚」という表現を用いる理由を確認したのち、具体的に、アイデンティティの感覚とはどのようなものかを、ジェームズとフロイトの言葉を用

いて、紹介した。ジェームズの手紙からは、アイデンティティの感覚の主観的・心理的要素を、フロイトの演説からは、アイデンティティの感覚の社会的・集団的要素を読み取ることができた。

続いて、エリクソンがアイデンティティの感覚の説明として挙げた「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚」という表現のなかの「斉一性と連続性の感覚」という部分に注目して、アイデンティティ概念の内容について検討した。そのなかで、アイデンティティの感覚が、斉一性や連続性を基盤とするものの、同一不変というわけではない点、および、アイデンティティ概念そのものもまた時代の変化に応じた変わりうるものである点を確認した。

以上のような考察を踏まえ、引き続き、エリクソンのアイデンティティ概念と「アイデンティティの政治」との関係についての研究を進めていく。本論では、アイデンティティの感覚に関する端的な説明である「はつらつとした斉一性と連続性の主観的感覚」という表現のうち、「はつらつとした」という部分について検討することができなかった。次の論稿では、エリクソンが展開した発達論およびライフサイクル論を踏まえて、「はつらつとした」感覚の意味を明らかにしたい。

## 注

- (1) 拙稿「E. H. エリクソンの理論からみたアイデンティティと政治 (1) —— 検討の視点とエリクソン理論の特徴 ——」『法経論叢』第39巻第2号(三重大学法律経済学会, 2022年) 1-20頁。
- (2) 鐘幹八郎『アイデンティティの心理学』(講談社, 1990年), 45-46頁。
- (3) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* (W・W・Norton & Company, 1968) p. 19. [中島由恵訳『アイデンティティ: 青年と危機』(新曜社, 2017年) 6-7頁。] 以下、エリクソンの著作からの引用については、日本語訳を変更している場合もある。
- (4) 例えば、白井利明は、著書の冒頭で、「アイデンティティとは何だろうか。誰でも知っている言葉だが、日本語ではないこともあって、今一つピンとこない人も多いのではないだろうか。言葉の意味は「私は何者かということ」である」と述べている。白井利明・杉村和美『アイデンティティ: 時間と関係を生きる』(新曜社, 2022年) i頁。
- (5) 小此木啓吾「概説・アイデンティティ論」『現代のエスプリ78 アイデンティティ: 社会変動と存在感の危機』(至文堂, 1974年) 5-8頁。
- (6) 同上書, 7頁。
- (7) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 16. [中島訳『アイデンティティ』2頁。]
- (8) 小此木啓吾「概説・アイデンティティ論」5頁。]
- (9) 溝上慎一『自己形成の心理学: 他者の森をかけたけて自己になる』(世界思想社, 2008年) 82-83頁。
- (10) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 50. [中島訳『アイデンティティ』48頁。]
- (11) *Ibid.*, [同上書, 49頁。]
- (12) Erik H. Erikson, *Insight and Responsibility* (W・W・Norton & Company, 1964) p. 147. [鐘幹八郎訳『洞察と責任』(誠信書房, 1971年) 148頁。]
- (13) Erik H. Erikson, *The Life Cycle Completed. Extended Version with New Chapters on the Ninth Stage of Development*, by Joan M. Erikson (W・W・Norton & Company, 1997), p. 74. [村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結増補版』(みすず書房, 2001年) 99頁。]
- (14) Erik H. Erikson, *Insight and Responsibility*, pp. 148-9. [鐘幹八郎訳『洞察と責任』149-150頁。]
- (15) 白井利明『アイデンティティ』13頁。
- (16) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 314. [中島訳『アイデンティティ』408頁。]
- (17) Erik H. Erikson, *Childhood and Society* (W・

- W・Norton & Company, 35th Anniversary Edition, 1985 [1950] p. 17. [仁科弥生訳『幼児期と社会1』(みすず書房, 1977年)4頁。]
- (18) *Ibid.* p. 36. [同上書, 37頁。]
- (19) Erik H. Erikson, *Identity and the Life Cycle* (W・W・Norton & Company, second edition 1980 [1959]) p. 21. [小此木啓吾訳編『自我同一性：アイデンティティとライフサイクル』(誠信書房, 1973年)9頁, 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』(誠信書房, 2011年)6頁。]
- (20) *Ibid.* p. 20. [小此木訳編『自我同一性』7-8頁, 西平・中島訳『アイデンティティとライフサイクル』5頁。]
- (21) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 49. [中島訳『アイデンティティ』48頁。]
- (22) Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, p. 17. [仁科訳『幼児期と社会1』4頁。]
- (23) Erik H. Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p. 27. [小此木訳編『自我同一性』17頁, 西平・中島訳『アイデンティティとライフサイクル』13頁。]
- (24) Erik H. Erikson, *Insight and Responsibility*, p. 233. [鑑訳『洞察と責任』240頁。]
- (25) エリクソンの同僚でもあり, エリクソン自身に出版を許可されたスティーブン・シュラインは, 「エリクソンはつねに, 治療者—患者のつながりというものが, 本質的には双方のパートナーが互いに与えることで利益を得るといって「他者を強くしているにもかかわらず, 自分も強くする相互性」だということを, 臨床家は忘れてはならない, と考えていた」と指摘している。スティーブン・シュライン, 鑑幹一郎・松本寿弥訳『クリニカル・エリクソン：その精神分析の方法：治療的かわりと活性化』(誠信書房, 2018年)229-230頁。
- (26) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 50. [中島訳『アイデンティティ』49頁。]
- (27) Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, p. 251. [仁科訳『幼児期と社会1』322頁。]
- (28) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 16. [中島訳『アイデンティティ』2頁。]
- (29) *Ibid.*, p. 18. [同上書, 5頁。]
- (30) 西平直『エリクソンの人間学』(東京大学出版会, 1993年)216-7頁。
- (31) 同上書, 61頁。
- (32) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, p. 19. [中島訳『アイデンティティ』7頁。]
- (33) *Ibid.* [同上。]
- (34) *Ibid.* [同上。]
- (35) *Ibid.* pp. 19-20. [同上書, 7-8頁。]
- (36) *Ibid.*, pp. 20-21. [同上書, 8-9頁。]
- (37) *Ibid.*, p. 21. [同上書, 9-10頁。]
- (38) *Ibid.* [同上書, 10頁。]
- (39) Erik H. Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p. 109. [小此木訳編『自我同一性』131-132頁, 西平・中島訳『アイデンティティとライフサイクル』111-112頁。]
- (40) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* p. 22. [中島訳『アイデンティティ』11頁。]
- (41) Erik H. Erikson, *Identity and the Life Cycle*, p. 109. [小此木訳編『自我同一性』131-132頁, 西平・中島訳『アイデンティティとライフサイクル』111-112頁。] なお, 西平・中島訳では自我総合は自我統合となっている。
- (42) *Ibid.*, p. 134. [小此木訳編, 156頁, 西平・中島訳, 134頁。]
- (43) エリクソンが, アイデンティティ拡散 (identity diffusion) という言葉を使っていたが, 後にアイデンティティ混乱 (identity confusion) に置き換えた。その経緯については, Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* p. 212 [中島訳『アイデンティティ』267頁] に説明がある。
- (44) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* p. 18. [中島訳『アイデンティティ』3頁。]
- (45) Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, pp. 38-45. [仁科訳『幼児期と社会1』40-49頁]
- (46) スティーブン・シュライン, 鑑・松本訳『クリニカル・エリクソン』27頁。
- (47) Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, p. 25. [仁科訳『幼児期と社会1』21頁。]
- (48) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* p. 67. [中島訳『アイデンティティ』72頁。]
- (49) Erik H. Erikson, *Childhood and Society*, p.



45. [仁科訳『幼児期と社会1』50頁。]
- 50) 宮下一博「アイデンティティ研究の必要性」 鎌  
幹八郎監修, 宮下一博・谷冬彦・大倉得史編『ア  
イデンティティ研究ハンドブック』(ナカニシヤ  
出版, 2014年) 5頁。
- 51) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* p.  
24. [中島訳『アイデンティティ』14頁。]
- 52) この点に関して, 西平直は以下のように述べて  
いる。「アイデンティティの〈発達〉について語  
りうとするならば, 当然そこには〈変わりゆく〉  
ことが含まれていなければならないことになる。  
〈同一性=不変性=固定性〉とは逆の, むしろ〈同  
一ではなくなること〉。ということは, アイデン  
ティティは, 一度「達成」してしまえば, もはや  
変わることはない, 同一であり続けるもの, とい  
うわけではないはずである。」「こうして, アイデ  
ンティティとは, 〈プロセス〉であり〈運動〉であっ  
て, それはいつてみれば, 古い自分を保持し一貫  
することと, より新しい自分へと再生してゆくこ  
ととのズレによって, またそのズレを産み出しな  
がらバランスを取ってゆこうとする運動として,  
理解されてくるのである。」西平直『エリクソン  
の人間学』212-213頁。
- 53) Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis* p.  
15. [中島由恵訳『アイデンティティ』1頁。]
- 54) R. J. リフトン, 外林大作訳『誰が生き残るか』  
(誠信書房, 1971年) 48頁。翻訳ではアイデンティ  
ティは同一性と訳されている。